

（『第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白』を朗読）

ただいまお読みした文章は、日本基督教団の「戦責告白」と略称されているものです。これは今から 54 年も前に公にされたものですが、教団創立 25 周年にあたって、教団成立と戦時下に教団の犯した過ちを懺悔告白し、明日にむかっの決意を表明した画期的な文書です。

「明日」(未来)に向かって進む時、大事なことは、まず過去の歩みを顧み、その過ちを反省し悔い改めるということです。ヴァイツゼッカー(ドイツの前大統領)は、ドイツの敗戦 40 年を記念した演説の中で、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ、現在にも目を閉ざすことにもなります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」とナチス時代のことを反省して、これからのドイツの国のあり方について語りました。これは、日本の政治家には見られない歴史に対する真摯な姿勢です。

私たち日本人の体質として、嫌な過去は忘れて「水に流し」、過去を美化して、「古き良き時代として」想い出に浸るといった傾向が強いのではないかと思います。ですから、「夢をもう一度」と、いつか来た道をもう一度たどって、同じ過ちを繰り返すのです。

しかし、イエスさまの教えは、「悔い改めて、福音を信ぜよ」という言葉に示されているように、神の前に謙虚に自らの歩みを省み、過去の罪を罪として懺悔告白して、主の赦しを得て、新しく生きるということです。ここにこそ、「新しく生まれる」という自由な、新たな生き方が展開されるのです。

そういう信仰的立場から、日本基督教団という私たちの教会の歴史を顧みる時、教会はあの戦時下において、はたして正しく主のみ心に従って、教会としての務めを果たしてきただろうか、という「責任」が神さまから問われているように思うのです。

かつて、日本の国は、天皇を神とする「国体」のもとで、朝鮮半島や中国・台湾などアジアの諸国に軍隊を送り、植民地として支配し、世界を相手にして無謀な戦争を引き起こしました。そういう中で、教会もそのような国家体制に巻き込まれ、戦争に協力し、皇軍の勝利のために祈願したのです。

あの戦時下において、日本の教会は、国から様々な圧力を受けました。「教団」の成立自体が、国家の圧力により、30 余派の教会が、一つに統制させられた結果でした。教団は、それにより「皇国の道に従って信仰に徹する」(教団規則第 7 条)という、天皇を神とする国家に奉仕する教会になったのです。それにも拘らず、ホーリネス系に属する旧 6 部、9 部の教会では、134 名もの牧師が検挙され、264 もの教会・伝道所が解散処分を受けました。治安維持法によって、再臨信仰や外国の宗教という偏見による弾圧です。

教団から「戦責告白」が出された時、私は丁度神学校を卒業する時でした。初め、教団からこのような「告白文」が出されることに対して、私はよく理解できませんでした。何故なら、当時、教会は国家の犠牲者、被害者であって、教団に戦争の責任はない、

と思っていたからです。このことについて、神学校の寮の食堂で、3年ほど後輩の澤正彦という神学生と論争したことがあります。彼は、当時から韓国と韓国の教会に深い関心を抱いていて、日本の軍隊が、朝鮮半島においていかに、残酷非道なことをおこなったか、また日本の教会がいかにあの植民地支配に協力したかを語ってくれました。例えば教団は、多くの牧師を海外に派遣して、現地の人々に日本の軍隊に協力するよう呼び掛ける「宣撫班」的な働きをしたり、また朝鮮全土に建てられた日本の神社(天照大神を祀る)を参拝することを奨励し、天皇を神として崇めることを教団の名において勧めるよう書簡を書き送ったりしたのです。そして、それに抵抗した多くのキリスト者が、日本軍によって殺されたのです。そのようなことを聞かされたことがきっかけに、私は戦時中の教会の文献を調べたり、韓国や中国の訪問を通して、戦時下における日本の国の犯した過ちと、教会の責任について目が開かれるようになりました。日本の教会はあの戦争において「被害者」であっただけではなく、「加害者」でもあったのです。そのような経緯を通して、私はこの教団の「戦責告白」を、「私の責任の告白」でもある、と思うようになりました。

この「戦責告白」の中に、「まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました」とあります。日本の国が犯した過ちは、「教団」の負うべき罪であり、「教団」の犯した過ちは、私たち一人一人が、担うべき罪責なのです。

この「戦責告白」の中心的な言葉は、本文の中央にある「『世の光』『地の塩』としての教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした」という言葉だと思います。この「世の光」「地の塩」という言葉は、言うまでもなく、先ほど司式者から読んで頂いた、マタイによる福音書5章13節、14節から取られたみ言葉です。この箇所は、イエスさまのなさった「山上の説教」の中の一部です。この山上の説教は、5章1節に記されているように、イエスさまの周りに大勢の群衆が押しかけて来たのをイエスさまがご覧になって、山に登られ、その山頂から語られた説教ですが、注目したいのは、「弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた」という言葉です。つまりこの山上の説教は、大勢の群衆に取り囲まれた弟子たちに語られたみ言葉である、ということです。この場面を図式化してみると、イエスさまを中点として、弟子たちの小さな輪と、それを取り囲む大勢の群衆からなる大きな輪という、二重の同心円の輪が描かれていると考えることができます。イエスさまは、その中心にあって弟子たちに語ることによって、大勢の群衆に向けても語っているのです。

私はここに、この世にある教会の姿を見る思いがいたします。教会はイエスさまを中心とした小さな群れです。そしてこの世は、教会の外側に広がる大勢の人々の群れです。私たちは、教会から外に出て、それぞれの生活の場に帰るわけですが、その生活の場は、イエスさまとは関係のない別の世界ではないのです。教会の頭(かしら)である主イエス・キリストは、世界の主として、その中心におられるのです。

イエスさまは、ここで、弟子たちに対して「あなた方は地の塩である」「あなた方は世の光である」と言われました。この「塩」も「光」もこの地、この世にあって、なければならぬ大切なものです。この暑さの中で、「塩」は水と共に欠かせないものです。

「塩」には、味の無いものに味をつけるという調味料としての役割もあります。また腐敗を防ぐ防腐剤としての役割を有します。不浄なものを清めるという役割もあります。「光」の重要性については言うまでもありません。光は闇の中にある人に、大きな喜びと希望を与えます。イエスさまご自身、「わたしは世の光である」と言っておられるように、この闇の世を照らす「光」として来られた方です。また、イエス・キリストは、すべての人に命と潤いを与え、世の腐敗と穢れを清める「地の塩」のような方です。そのイエスさまが、ここで、弟子たちに「あなたがたは地の塩である」、「あなたがたは世の光である」と言われたのです。弟子たちはイエスさまに招かれ、イエスと結ばれることによって、「地の塩」「世の光」とされたのです。

この言葉は、弟子たちにとって、どんなに大きな驚きであったことでしょうか。この世にあって、自分たちの弱さや無力さを嘆いていたこの「小さな群れ」にとって、「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」と言われた主のみ言葉は、どれほど大きな慰めと励ましを与えたことでしょうか。この主イエスのみ言葉は、弟子たちに、「あなた方は決して無力な、意味のない存在ではない。この世において大切な意味と役割をもった存在である」ということを意味しているのです。それは、弟子たちの周りにいる多くのこの地の人々、この世の人々に対して、「塩」として、「光」としての使命と責任を果たしていくという役割です。

このことは、主イエスによって召された者の集まりは、自己目的のための集まり、つまり自分たちだけが喜び楽しみ満足するという集まりではなく、「世のための集まり」である、ということの意味します。キリストがこの世のために来られ、この世のために十字架の道を歩まれたように、主によって呼び集められた群れも、「世のため」「地のために」存在する集まりであるということです。K・バルトという有名な神学者は「教会は世のために存在する時にのみ、教会である」ということを強調しました。自己目的化して、自分たちの個人的・内面的な安泰や幸せだけを認める教会は、少なくとも「キリストの体」とは言えないのです。

「あなた方は地の塩である」「あなた方は世の光である」という主のみ言葉は、そのような、教会のこの世におけるあり方を示唆した言葉です。「戦責告白」は、この「世の光」「地の塩」という言葉を用いることによって、日本の教会は、あの戦時下において、この世に対する責任を果たし得なかったことを、主の前に率直に反省し主の赦しを乞うているのです。このことは、次の段落で、「わたくしどもは『見張り』の使命をないがしろにいたしました」という言葉によっても表明されています。「見張りの使命」とは、預言者的使命のことです。旧約の預言者たちは、エリヤにしても、イザヤ、エレミヤにしても、それぞれの時代の中で、時代の流れに流されたり、権力におもねたり、この世に同調することなく、時のしるしを見極めて、その時々に必要な神のみ心を証しました。そのために孤独な闘いを強いられることもありましたが、彼らは「まさに国を愛する故にこそ、祖国の歩みに対して、(信仰による)正しい判断をなし」道しるべとなったのです。世にある教会は、常にこの世に対して、そのような「見張りの使命」を与えられているのです。

教団の「戦責告白」は、そのような「見張りの使命をないがしろにし」、「教団の名に

において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めた」ことを懺悔告白し、「主に赦しを願うと共に、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、また我が国の同胞に心からの赦しを乞う」ものでした。

この「告白」によって、アジアの諸教会との和解の道が開かれ、沖縄の教会との合同が成立いたしました。と同時に、この世における教会の存在意義、つまり教会のこの世に果たすべき使命と責任を明らかに指し示したのです。

この「戦責告白」の最後は、「わたしどもの愛する国は、今日、多くの問題をはらむ世界の中であって、ふたたび憂慮すべき方向に向かっていることを恐れます。この時点においてわたしどもは、教団がふたたびその過ちを繰り返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けを求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります」と結ばれています。

それから 54 年、敗戦後 76 年を迎えようとしている今、世界と私たちの国は、同じように憂慮すべき方向に向かっています。私たちは今一度、「地の塩」「世の光」としての自覚をもって、主イエス・キリストの塩味をもってこの世に仕え、与えられている光を高く掲げて、平和を造り出すために祈り、努めたいと願います。           アーメン